

高原地域におけるイチゴの省力安定育苗

農業研究センター 高原農業研究所

担当者：小野 誠

研究のねらい

高原地域は、慣行の育苗方法では、気象的に不利なばかりではなく、田植えなど他の農作業と競合し、大苗育成が難しく年内および総収量が少ない現状にある。そこで、それらを解決するため、「とよのか」の省力で安定的な育苗方法について検討した。

研究の成果

- 1 越冬苗はクラウン径の大きい苗を春早い時期に得ることができるので、収穫期間の早進化を図る場合やクラウン径の大きい苗の確保に有効である。
- 2 育苗ポットの大きさについて、12cmと10.5cmについて比較したところ、促成や超促成では大きな差がなく10.5cmでよいと思われ、軽作業化が図られる。
- 3 大量増殖苗由来のセル成型苗を用いることにより、慣行の育苗期間より30日以上早く、同じクラウン径の苗を得ることができる。
また、ランナーが得られない低温期などでも育苗が可能である。
さらに、育苗の段階で2芽苗を簡単に作ることができる。
- 4 根巻き防止剤を育苗ポットに塗布することにより根巻きが抑制され、根量が多く、徒長しにくい、活着のよい苗が得られる。
なお、生育・収量・品質に負の影響を与えない。

普及上の留意点

- 1 根巻き防止剤を塗布した育苗ポットを次年度以降使用する場合、根巻き抑制効果が落ちている場合があるので留意する。

表1 育苗の種類とクラウン径(7月10日調査)

当年苗	7.7cm
越冬苗	10.2cm

注)1 越冬苗:定植する前年の8月頃に親株を植え、その株から出た小苗を越冬させたもの。
2 当年苗、越冬苗ともに4月30日鉢上げ。

表2 育苗ポットの大きさと商品果収量

	年内	5月まで
	kg/a	kg/a
12.0cm	117.5	522.0
10.5cm	108.6	531.5

表3 苗の種類とクラウン径

鉢上げ後日数	30日	60日	90日
	mm	mm	mm
慣行	6.7	8.1	9.9
大量増殖苗	6.5	9.8	10.5

表4 定植時の2芽苗率

慣行	0%
大量増殖苗	100%

表5 根巻き防止剤処理と商品収量

	年内	5月まで
	kg/a	kg/a
慣行	117.5	522.0
根巻き防止剤	128.7	551.3